

昭和6年2月1日 第3種郵便物認可  
平成19年11月1日発行 毎月一回 1日発行  
俳句雑誌 沖 第33巻第11号



沖

俳句雑誌「おき」

11  
月号

沖  
發行所

# 柱鏡

能村 研三

## 忌日俳句

ぬばたまの黒飴さはに良寛忌  
老残のこと伝はず業平忌

夏 瘦 せ て 勘 の 鋭 く な り に け り

風 死 し て 壺 の 音 聞 く 鑑 定 士

朝 涼 の 少 女 の 赤 き 弓 袋

山 号 の 付 与 さ る 寺 へ 登 高 す

ともに先師登四郎の定本句集『咀嚼音』に収載されている忌日俳句で、どちらも馴染み深い句である。登四郎は決して忌日俳句を多く詠んでいるとは思えないが、この二句は俳壇で評判となった句である。

最近『文学忌俳句歳時記』という本が出版された。テーマ別歳時記のシリーズの一冊で、日本文学史、文化史的に文学者の「忌日」をまとめたものだ。

こうした歳時記は、俳句を作る手引きとして使うのもよいが、文学史的な研究や文学散歩などにも役立っても面白い。

「忌日」は一般の歳時記にも季語として収載されているが、季節が余り感じられないかも知れない。私も好んで忌日俳句を詠むほうではないが、故人のことを余り知らないで興味半分で作るのは慎むべきと思っている。

かつて佐藤鬼房は、渡辺白泉や高柳重信を偲んだ俳句をいくつか残しているが、「忌」という言葉が持つ

秋ともし料理鉢を錆びさせず

芋煮会白き流木置かれあり

稲妻のたびに気付ける景色あり

色違ふ荷の紐を足す夜長かな

鯛雲柱鏡に映りをり

秋うららら序で仕事も本気なり

既成の追慕回想の思いが際だって、作者固有の死者への思いが伝わらないことが多いとして、一度も「忌」という言葉を使わなかったそうだが、しかし私はそこまで厳密には考えない。その故人に特別な思いがあればその思いを込めて詠めばよいと思っている。

この忌日歳時記には、先師登四郎の忌日も「登四郎忌」「朴花忌」として多くの沖人の俳句が収められている。

能村 研三



# 月の兎

林 翔

## 「沖」第二号回顧

「沖」の創刊号については、私も書いたし多くの人が書いているが、第二号（昭和45年11月号）については誰も書いていないから、ちよつと紹介してみよう。

先ず投句者数であるが、創刊号は八八名で、未広がりで縁起がいいと喜び合ったものであるが、それに特別作品二名と、主宰・編集人を加えれば、九二名での出航であった。第二号は投句者一三一名、それに特別作品の四名と登四郎・翔を加えれば一三七名。一挙に五割近くも殖えたのであった。

本号は「枯野の沖特集」として、登四郎第三句集『枯野の沖』について、田川飛旅子・大川つとむの両氏が文章を寄せているほか、安住敦・飯田龍太・石川桂郎・桂信子・金子兜太・岸田稚魚・沢木欣一・千代田葛彦・野沢節子・森澄雄の十氏が、「枯野の沖・十句選」を寄せておられる。

名月や雲ゆるやかにゆるやかに

幼時に見し月の兎よとしとらぬ

指揮棒が秋気踊らせ曲をどる

電波の樂虫の音も亦交響す

虫の音よ闇に鑢を掛けつづけ

若き日の恋に似て消ゆ秋の虹

これやこの越の新米先づ眺む

冥土では食へぬぞ新米握り飯

一つ見え三つ四つと見え栗の毬

藁ぼつち背くらべして好い天気

(登四郎氏も故人になられたが、これら高名俳人も大部分が故人になられていることを思うと、感慨深い。)

他に、創刊号に続いている寄稿「能村登四郎ノート(Ⅱ)『合掌部落』

周辺」を川崎三郎氏が寄せている。

特別作品は高瀬哲夫・坂巻純子がそれぞれ15句ずつ。初句を挙げる。

空見えて誰もをらざる昼寝寛

哲夫

見つめられある戸惑ひの蓮ひらく

純子

沖作品巻頭は都筑智子であった。

螢火や玲瓏たる歩一人得し

智子

以下6句。

林 翔



# 蒼茫集



栗強飯

酒本八重

二人にはふたりの味や茗荷汁  
つま先がふいに昏れ行く草の花  
新秋の沈金しるき輪島塗  
曼珠沙華野ねずみの穴ありにけり  
一人子が優勝したる栗強飯  
新走り高麗王の銘貼られたり

衣被 安居正浩

盆菓子の原色に父遠くなる  
繫がつて弱冷房車冷房車  
蟬の死へ蟬巾ひの声降らす  
人生に波あり秋に渚あり  
縁側に虫籠置けば日暮れけり  
止り木に雨音を聞く衣被

ちちろの夜

北川英子

濁流の水位刻々月見草  
熟すまで言葉寝かせてちちろの夜  
欠航のまだ続く空鳥渡る  
下刈の鎌しばし置く葛の花  
凡常の或る日突然曼珠沙華  
竜ひそむ淵か気泡のつづけざま

ちちはは 荒井千佐代

母の忌の弥撒へ朝露踏みしめて  
かまつかや父母のなき世に慣れずをり  
島を打つうしほ良夜の書斎より  
秋蝶やエプロンの紐嬰に解かれ  
凌霄の黄や宿罪に色あらば  
ちちははの骨を思へり雁の頃

傾斜 上谷昌憲

一帆のあやふき傾斜野分立つ  
サルビアのさばしる中央分離帯  
かなかなの極上のこゑ誰か逝く  
鬼灯のぼつとあからむ吾妻橋  
釘の頭の網目模様も厄日かな  
秋の蝶宙に迷路のあるごとし

かまつかは… 千田百里

小鳥見てをりははも見てみし縁側で  
豊の秋みずほ銀行忙しく  
秋の声太白星の出づるとき  
夜長の灯復習髪結ふをとこかな  
ちちろの夜つくづく夫の無精髭  
かまつかは燃えよ戦火は衰へよ

秋の蝶 望月晴美

白靴やひたすらに追ふところぞし  
新涼や風見ゆるほど窓磨く

わが町の玉太りよき梨を剥く  
台風裡ただよふごとく帰宅せり  
招かれし上座秋扇使ひづめ  
もういいと思はぬことや秋の蝶

忘れ潮 秋葉雅治

粥炊いて二十日の和(な)ぎごこち  
桃をむく爪長うしてゐはせぬか  
分け入つて五体投地の大花野  
年輪は知らず敬老日の巨木  
わたつみの引力強し秋落暉  
望の月うつす礁の忘れ潮

白こそは 千田 敬

迎火の見えて横丁奥ふかし  
遠き日の訓点の知恵水澄みて  
季語繰るは迫遙に似て菊の月  
退く気なき日照雨がひかる厄日かな  
白こそは日本の色障子貼る  
泡あげていのち継ぐもの風白し

# 潮鳴集

ひと雨

代田 幸子

ひと雨のすぐに乾きて草の市  
青みかん部屋の空気の入れかはり  
秋燕町より消えし荒物屋  
芋の露信濃の星のはや点り  
トロツコの秋天よぎる採石場

ルーペの字

富川 明子

満月に期す心あり職退きて  
秋暑し行間読めぬルーペの字  
島ひとつ金色背高泡立草  
飛込みの指の先まづ水を割り  
脱稿はまだ鉦叩さう急くな

拾へぬ電波

甲州 千草

夕焼を入れてモップのもみ洗ひ  
特急の光塵を受く疣むしり  
アンテナの拾へぬ電波草の絮  
もう川にとどかぬ石やをとこへし  
ダックスフントの長さを濡らす霧雫

散りどき

田辺 博充

背泳ぎや病める世の空とも見えず  
百日紅あはれ散りどき逸したる  
桐一葉落つそれからの永きこと  
わたつみに母性のうねり今朝の秋  
塞の神従者がちやがちや喧しき





# 沖作品



## 能村研三選

廃校の廊下花野へつづきををり

千葉

鶴見 遊太

鉄橋の影の刻印雲の峰

白玉や日曜版を風めぐり

爪切つてひとつ物音秋はじめ

一舟を離れ一舟湖の秋

梅雨明けや鳴門の渦に青き苾

虫の夜のオンザロツクの瑠璃の音

流星の異国に消ゆる宗谷かな

虫の夜や人肌といふ熱きもの

鷹渡る波は地球の力瘤

水鉄砲二丁を持つて子に向かふ

老いてこそ子供になれる夏祭

ぼつりと碑蛭ヶ小島の曼珠沙華

砂山は未完のままに稲光

白亜紀をこきぶり生きてゐたらう

神奈川

福島 茂

東京

七種 年男

百態の水の疲れや浮人形

愛知

三好千衣子

夕日いま水にはなやぐ川床料理

送り火や燠となるまで護摩焚いて

丹の失せしこけしの負へる大西日

星飛んで始めに戻る艶話

コスモスや自然消滅てふ別れ

すりきりの小匙一杯今朝の秋

新涼の砲台跡の五角形

男踊とは世の風を斬るやうに

七夕や光りて落ちるグラニュー糖

蟬の穴活断層を抜けきしか

船宿の留守を金魚にあづけをり

白玉食む母のやうには生きられず

新米の一番刈りや予後よかれ

野分して泡こまやかにカプチーノ

茨城

内山 花葉

東京

小嶋 洋子

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

廃校の廊下花野へつづきをり

鶴見 遊太

過疎化、少子化が急速に進む現代社会は、多くの学校を廃校に追い込んでいく。卒業した思い出のある学校が失われてゆくのは何とも寂しいことだが、この句はそのマイナスの要素をマイナスのままにせず、向日的な展開を図っているのがよい。廃校の校舎も一部を壊し始めたのであろうか。思い出が一杯詰まった廊下も賑わいになって無残の姿になってしまったが、それをただ哀れんでいるだけでなく、それが未来ある花野へ続いていると受け止めた向日的な姿勢はすばらしい。

鷹渡る波は地球の力瘤 七種 年男

鷹は渡り鳥で九月になると南に渡って行く。伊良湖岬や佐田岬などで、差羽が飛び立つ光景が見られる。天候など気象条件を事前に察知して効率的に海を渡る悠然と大空を舞い、渡りを続ける鷹が俯瞰した海の風景であろうか。大海原に波立つ波頭が地球の力瘤に見えてきた。壮大なスケールから捉えた句とし

ておもしろい。

老いてこそ子供になれる夏祭 福島 茂

社会人として第一線で活躍している時期は、周りに遠慮があつて中々自由奔放な動きをするわけには行かない。祭だから無礼講といきたいところだが、思い切った行動は取れないでいた。しかし老人になると、もう怖いものがなく大胆になることが出来た。

夕日いま水にはなやぐ川床料理 三好千衣子

川床料理と言うと京都の貴船などが有名。流れる溪流の上に乗板を渡して、畳を敷いて座敷をつくり、その上で川のせせらぎを聞きながら会席料理を楽しむ。盆地で暑い京都ならではの風流な楽しみ方と言える。夏の涼を求めて、川面の涼風による体感温度的な涼しさも味わえる。夕日が落ちる夕ぐれ時は水面に日を映し華やきを見せてくれた。

コスモスや自然消滅てふ別れ 小嶋 洋子

最近の若い人たちの恋愛では「自然消滅」という別れ方があるようだ。この方がお互いを傷つけずに元に戻れるというのだろう。昔は恋愛ももっと真剣でエネルギーを使ったものだが、若い人たちの考え方も次第にクールになってきたようだ。

新米の一番刈りや予後よかれ 内山 花葉

米作りをしている人にとつては、手塩にかけて育ててきた米を収穫するときの思いは格別なものがある。天災も免れずまず安堵の瞬間でもある。この句は長年農業に携わった長老が病

に伏していたのだろうか、幸いにも体も回復して一番刈りを頼むことになった。周囲の人たちの思いやりが感じられる句である。

(以下略)